



スポーツ文化評論家 玉木 正之

(8)

1919年、ベーブ・ルースが29本のホームランを真っ飛したとき、保守的な新聞は、「野手が手を伸ばしても捕れないような打球を放つのは卑怯だ」と非難した。ルースが登場する以前は、ごく

ち(プレスメントヒット)だけたまに出るランニング・ホームランなど誰も注目せず、新聞に本塁打の記録欄もなく、本塁打王の表彰もなかった。打者が評価されたのは内野手の間を鋭く破る狙い打

だったのだ。が、多くのファンは天高く舞いあがり青空に吸い込まれるルースの打球に魅せられて大喝采。60本まで記録を伸ばした彼は、ある試合で打席から外野スタンドを指差し、予告通りにホームランを放った。しかもそれは、難病で入院中の少年との約束の一打だった。スペクタクルとドラマ。野球はその二つの要素に彩られている。

The New York Times/Redux/アフロ



ルースの打席は、さらに笑いにも溢れていた。彼がバットボックスに向かうと相手ベンチからバットボーイが走り出て、プレゼントを渡す。その箱をルースが開けるとバネ仕掛けの道化の人形が飛び出し、ルースも観客も大笑い。

「野球は人生そっくりのリアルなスポーツ」(彼は言った。三振もし失策もし、赤ん坊と呼ばれて愛された男の引退試合の背中は、物悲しくもあるが美しい。